

阪神淡路大震災から30年、日本赤十字社と天地成行

広報で御縁

精神疾患になつて、本社に出入り

阪神淡路大震災から一月十七日で、30年ということで「赤十字とわたし」と題し、紙面をつくってみたいと思いました。ボランティア国際ボランティア会の有馬実成さんも、赤十字同様、大変にこの

神戸を中心に尽力されました。今回のメインテーマは赤十字でいきます。日本赤十字社本社とのご縁について、発作的に触れたくなっていたんです。東京・港区の本社一



島根大学一回生の時に山口県の青少年赤十字後輩の合宿に参加、上段④が開村修三さん

恩師・開村修三先生の一言「赤十字新聞」手伝う役目

階に赤十字情報プラザに今はお勤め(当時広報室)で、「赤十字新聞」担当だった、遊童さん(みんなつどファンで、天地成行ファンクラブ二号!)に「書いていいでしょうか?」と尋ねOKをいただきました。

1991年の山口県の高校生だったわたしは、継承者のいない、つづれそうだった、徳山高校の青少年赤十字(JRC)部を引き継ぐことになりました。そこで、偏差値教育に飽きていた、数人の仲間で毎日「気づき・考え・行動する」のJRCの考え方で、ゲートボールや手話や施設訪問や海岸清掃や、いろんなことをしました。阪神淡路大震災(1995)の前ですの、そういう意識はなかなか芽生えが薄い時代でありました。そういうもんで、活動すればするほど、魂は磨かれてい

るな、というのに反比例して、どんどん学校の勉強がいやになりました。肢体不自由児の女の子の握力の強さを右手にじんじん感じることや、手話で障害のおにさんがエッチな俗語を教えてください、ゲートボールのおじいさんが、「なつとらんスイングが」こつちきて、ほら、目をつぶってこうしてこうじゃー」みたいな面白指導など生きた教材は枚挙にいとまなしでございました。

いま、東京大先端研の教授で有名な、熊谷晋一郎先生も二級下で、わたしと恩師の開村修三先生(故人)が萩往還(山陰側の萩から山陽側の防府までの参勤交代への道)で視覚障がい者の方とともに歩いたときに、確かご両親以外で初めてトイレのお手伝いをしたようです(先生が後年おっしゃってました)。

